

## 「寒花」と「如蘭」——婦有光の文学と「花」——

鷲野 正 明

### はじめに

婦有光（一五〇六—一五七二）の散文は、平易な描写のなかに尽きぬ「おもい」が込められている。なかでも家族や家庭内の瑣事を描く作品には、独特の風韻が漂う。王錫爵（一五三四—一六一〇）の「明太僕寺寺丞歸公墓誌銘」では、婦有光文学の特色を次のように云う。

所爲抒寫懷抱之文、溫潤典麗、如清廟之瑟、一唱三嘆、無意於感人、而歡愉慘惻之思、溢于言語之外、嗟嘆之、淫佚之、自不能已矣。

（為る所の懷抱を抒写せるの文は、溫潤典麗にして、清廟の瑟の如く、一唱して三嘆、人を感じしむる意無きも、歡愉慘惻の思ひ、言語の外に溢れ、之を嗟嘆し、之に淫佚すること、自ら已む能はず。）

選集類に採られる、家族や家庭に材を取った作品は、「先妣事略」（卷二十五）や「項脊軒志」（卷十七）「寒花葬志」（卷二十二）などであるが、他に「女如蘭壙誌」（卷二十二）「女二壙誌」（卷二十二）といった幼女を描いた作品もある。いずれの作品も「死」がテーマであり、悲しみが底に流れている。

家族の死を哀悼する文は韓愈（七六八—八二四）などにもあり、婦有光がはじめてではない。しかし、婦有光の家族の「死」を扱う作品は極めて多い。それはそれだけ家族に不幸があったからであり、また、個人的な家庭内の瑣事を「古文」で作品化したいと思う強い創作意欲があったからに他ならない。

当時「公」の場では、「生」を寿ぐ「寿序」が広く受け入れられ、「古文」がより身近なものとして享受される社会的な環境が整っていた。<sup>(3)</sup>しかし、「私」の「死」を扱う「古文」は、作家の家族親戚に「死」がなければ書けないものであり、たとえ「死」があったとしても作品化せずに済まず場合もある。ところが、婦有光はあえて作品

化した。そこには、帰有光のやみがたい「おもい」があり、他の作品とは違う措辞や構成が見られるのではないかと推測されるのである。

ところで、家庭内の瑣事を描いた作品の中でも、亡くなった女子を描いた「寒花葬志」と「女如蘭墳誌」は、特異な存在である。それは、花に言及することが稀な帰有光作品において、この二人には「寒花」「如蘭」と、その名前に「花」がつけられていること、しかも「寒花」は寒い時期に咲く花、つまり「菊」であり、「如蘭」の「蘭」は春に咲く花であり、秋と春とに咲く花をもって一对とした名であるからである。この二人には、特殊な事情がある。

如蘭の母親については従来不明とされてきたが、<sup>(1)</sup>帰有光の最初の妻魏氏が亡くなったあと、帰有光と婢である寒花との間に娘の如蘭が生まれた。<sup>(5)</sup>簡単に言えば、婢である寒花と如蘭は親子、ということである。二人に一对の花の名がつけられているのは、そのためである。

本論では、もと腰であった、と云う「寒花葬志」における「寒花」の立場を明らかにした上で、「寒花」と「如蘭」の名の由来を考察し、帰有光文学における哀傷の表現について考えてみたい。

若くして亡くなった「寒花」と一歳ほどで夭折した「如蘭」、その名前に「花」が用いられているのは、帰有光のやみがたい「おもい」が結晶しているのであり、「蘭」ではなく「如蘭」であるのにも理由がある。なお、本論での年齢表記は「数え」である。

## 一、寒花—腰の役割

寒花は、婢である。妻の魏氏が帰有光のもとに嫁いできたとき、腰として一緒に帰有光のもとにきた。時に寒花はわずかに十歳。寒花の死を悼む「寒花葬志」(巻二十二)の全文は以下のように短い。

婢、魏孺人腰也。嘉靖丁酉五月四日死、葬虛丘。事我而不卒、命也夫。婢初腰時、年十歲。垂雙鬢、曳深綠布裳。一日天寒。爇火煮菰薺熟、婢削之盈甌。予入自外、取食之、婢持去不與。魏孺人笑之。孺人每令婢倚几旁飯。即飯、目眶冉冉動。孺人又指予以爲笑。回思是時、奄忽便已十年。吁、可悲也已。

内容ごとに分け、書き下してみよう。寒花の生前の描写は①②③だけである。①は十歳のとき腰としてやってきた寒花のかわいらしい様子、②は婢として台所で働くさま、③は婢であるにもかかわらず主人と同じ食卓で食事をとる様子、である。いずれも妻魏氏との関わりがなかで描かれている。

A 婢は、魏孺人の腰なり。嘉靖丁酉五月四日に死し、虚丘に葬る。我に事へて卒へざるは、命なるかな。

① 婢初め腰せし時、年十歳。双鬢を垂れ、深緑の布裳を曳く。

② 一日天寒し。火を爇き菰薺を煮て熟し、婢之を削りて甌に盈つ。

予外より入り、取りて之を食はんとするに、婢持ち去りて与へず。魏孺人之を笑へり。

③孺人毎に婢をして几の旁に倚りて飯せしむ。飯に即くに、目眶冉冉として動く。孺人又予に指さして以て笑ひと為せり。

B是の時を回想すれば、奄忽として便ち已に十年。吁、悲しむべきのみ。

帰有光は、文を司馬遷の『史記』に学んでいる。『史記』は、人物を描く際、その人物があたかも目の前にいるように、細かな所作や会話をとおして具体的に描く。また、人物を活写する際、もっともその人物の特徴が表れるような逸話や場を選んでいる。帰有光の文も、寒花の仕草や目の動きまで、細かいところまで描写し、そして、寒花の人柄を表す、もっとも印象的な時と場を選んでいる。

「寒花葬志」が書かれたのはAに「嘉靖丁酉」、嘉靖十六年（一五三七）とある。Bには「回思是時、奄忽便已十年」とあるので、逸話①③はその十年前、「数え」の数え方で嘉靖七年（一五二八）のことと分かる。嘉靖七年（一五二八）は、帰有光二十三歳、まさしく魏氏が嫁いできた年である。新妻との新しい生活が始まり、そこにかわいらしい寒花がいる。不幸にも若くして亡くなった寒花を生き生きと描くには、帰有光にとって最も印象に残った場と時とを選ばなければならぬ。それは、初めて会った時のあどけない寒花であり、新妻と過ごす楽しい一時であった。しかし、妻の魏氏は結婚して六年目の嘉靖

十二年（一五三三）に亡くなり、寒花はその四年後の嘉靖十六年（一五三七）、十九歳で亡くなる。寒花への哀悼は、亡き妻への哀悼でもある。

さて、寒花は新婦の媵として婚家にやって来、逸話②③に見えるように、婢として働いている。媵と婢とはどのような相違があるのだろうか。

媵について、『左伝』成公八年に次のようにある。

衛人來媵共姬、禮也。凡諸侯嫁女、同姓媵之。異性則否。

（衛人來りて共姬に媵す、礼なり。凡そ諸侯女を嫁するに、同姓之に媵す。異性は則ち否らず。）

媵は、新婦に従ってくる者であり、文中の「同姓」は、以下の『公羊伝』莊公十九年に云うように、妹や従妹をさす。

媵者何。諸侯娶一國、則二國往媵之。以姪娣從。

（媵とは何ぞ。諸侯一國より娶るに、則ち二國往きて之に媵す。姪娣を以て從はしむ。）

なぜ媵が必要なのか。それは、側室となり、新婦に男児ができないときに跡継ぎを残すためである。

妾も媵と同じ役目をもつが、位としては妾の方が媵より一等降る。

『新唐書』車服志に云う。

五品以上、媵降妻一等、妾降媵一等。

(五品以上、媵は妻より降ること一等、妾は媵より降ること一等。)

妾も媵も、一族の永続と繁栄のためにはならない存在であったことが、以上の資料から窺えよう。

さて、正妻が亡くなった場合、妾媵はどうなるのであろうか。

江南では多く妾媵に家事を主らせ、必ずしも重ねて娶ることはなかった、と『顔氏家訓』に云う。

江左不諱庶孽。喪室之後、多以妾媵終家事。疥癬蚊蚋、或未能免、限以大分。故稀閨闈之恥。河北鄙於側出、不預人流。是以必須重娶、至於三四、母年有少於子者。

(江左庶孽を諱まず。喪室の後、多く妾媵を以て家事を終ふ。

疥癬蚊蚋、或いは未だ免れること能はざるも、限るに大分を以てす。故に閨闈の恥稀なり。河北側出を鄙しみ、人流に預からず。是を以て必ず須らく重ねて娶ること、三四に至り、母の年子より少き者有り。)

降って宋代、王懋の『野客叢書』<sup>(8)</sup>では『顔氏家訓』を引いて次のよ

うに云う。

自古賤庶出之子、王符無外家、爲鄉人所賤。孝武曰、崔道固如此。豈可以偏庶侮之。顔氏家訓曰、江左不諱庶孽。河北鄙於側出。江左喪室之後、多以妾媵主家事、河北必須重娶、至於三四母。至唐而此風猶存。

(古より庶出の子を賤しむも、王符外家無くんば、郷人の賤しむ所と爲る。孝武曰く、崔道固此くの如し。豈に以て偏へに庶のみ之を侮るべけんや、と。顔氏家訓に曰く、江左庶孽を諱まず。河北側出を鄙しむ。江左喪室の後、多く妾媵を以て家事を主らしむるも、河北必ず須らく重ねて娶り、三四の母に至る、と。唐に至りて此の風猶ほ存す。)

『顔氏家訓』を証拠として、北方と南方とで再婚に対する考え方に違いのあることを述べる。江南では、「庶孽を諱まない」ので、「多く妾媵を以て家事を主らせた」が、河北では「側出を鄙しむ」ので、「必ず須らく重ねて娶り、三四の母に至る」という。

女性の使命は男児を生むことにあった。正妻なき後も江南の「妾媵」は、後嗣を残す役割を担っていた。だから、あえて後妻を娶る必要はなかった。江南ではその習慣が少なくとも唐代まではあった。

それでは、明代ではどうだったのであろうか。婦有光と同時代で、婦有光の出身地の崑山に近い太倉出身の王世貞(一五二六―一五九〇)

は、「史大母王孺人墓誌銘」で次のように云う。

孺人亦不好妬、念無子置媵。

（孺人亦た妬を好まず、子無きを念ひて媵を置く。）

後嗣はほしいが、他の女性を置くと嫉妬するので、媵を置いた、と。明代においても、江南では媵の役割が古代から変わらずに受け継がれていたことがわかる。

婦有光の作品中、「媵」は「寒花葬志」に二回出てくるほかに、わずかに「太学生葉君墓誌銘」に一回出てくるだけである。<sup>⑩</sup>しかし、王世貞の作品では、百十五回「媵」が出てくる。王胤昌に宛てた書牘<sup>⑪</sup>にも

年近三十無子。先君爲置二媵、連舉三子。其媵一死一存。存者亦且老矣。

（年三十に近くして子無し。先君為に二媵を置き、連りに三子を挙げ。其の媵の一は死し一は存す。存する者も亦た且に老いんとす。）

と、後嗣を残すために媵を置いたことが記されている。それも一人だけではなく、二人置いたこと、そして三人の子を設けたという。同様の記述は「王處士有年暨馮令人合葬志銘」<sup>⑫</sup>にも

又不宜子。乃始置媵張、得一子。

（又子に宜しからず。乃ち始めて媵の張を置きて、一子を得たり。）

とある。王世貞のこれらの資料から、子がない場合、媵を置いて子を生ませることは、ごく普通のことであったことが窺える。

婦有光が結婚したのは二十三歳である。魏孺人の年齢は分からない。婦有光の母親が、婦有光が七歳の時に婚約を決めた人であるから、もし生まれたばかりの女兒を婚約者にしたとすれば、嫁いで来たのは十六歳の時ということになる。女性の結婚年としては適齢であるが、婦有光の結婚年は当時にしては遅い。男が十八歳で十四歳の女性と結婚すると仮定すると、婦有光二十三のとき魏氏は十九歳である。いずれにしても、十歳の寒花が媵として従ってきたのは、結婚後子供ができなかったときの「保険」であつたと想像できる。三・四年も経てば、寒花は十三・四歳の適齢になる。

「寒花葬志」の冒頭A「婢は、魏孺人の媵なり」は、生前の逸話①③を導き出すとともに、「我に事へて卒へざるは、命なるかな」を導き出す周到な文である。あえて「婢は、魏孺人の媵なり」と云い、「我に事へて卒へず」と云うのは、婢として、あるいは媵として最後まで仕えることができなかったことを強調するためである。

## 二、如蘭—その母について

妻魏氏との間には、一女一男が生まれている。長男の子孝（翽孫）の死を悼む「亡兒翽孫墳誌」（巻二十二）に云う。

嗚呼、余生七年、先妣爲聘定先妻、而以吾姊與王氏、一年而先妣棄余。余晚婚、初學吾女、每談先妣時事、輒夫婦相對泣。又三年生吾兒。先妻時已病、然甚喜、呼女婢抱以見舅氏。臨死之夕、數言二兒、時時戟二指以示余。可痛也。蓋吾祖始有曾孫。故其母字之曰曾孫。余重違其母言、又以曾孫不可以爲諱、故名翽孫云。

（嗚呼、余生れて七年、先妣爲に先妻を聘定し、吾が姊を以て王氏に与ふるも、一年にして先妣余を棄つ。余晚く婚し、初めて吾が女を挙げ、先妣の時事を談ずる毎に、輒ち夫婦相對して泣く。又三年にして吾が兒を生む。先妻時に已に病むも、然れども甚だ喜び、女婢を呼びて抱きて以て舅氏に見せしむ。死に臨むの夕、數しば二兒に言ひ、時時二指を戟して以て余に示す。痛む可きなり。蓋し吾が祖始めて曾孫有り。故に其の母之に字して曾孫と曰ふ。余重ねて其の母の言に違ひ、又曾孫を以て以て諱と爲すべからず、故に翽孫と名づくと云ふ。）

この「亡兒翽孫墳誌」の中間あたりに

三月而喪母、十六而棄余。

（三月にして母を喪ひ、十六にして余を棄つ。）

とあることから、長男子孝（翽孫）は母の魏氏が亡くなる三ヶ月前に生まれた。亡くなったのは、「數え」の十六歳である。文の最後に嘉靖二十七年（一五四八）に亡くなったことが記されているので、子孝（翽孫）が生まれたのは嘉靖十二年（一五三三）である。この年に、母の魏氏（婦有光にとつては妻）が亡くなっている。

長女が生まれた年は、右の文中に「又三年生吾兒」とあるので、翽孫の生まれた嘉靖十二年（一五三三）から逆算すると、その三年前の嘉靖九年（一五三〇）ということになる。しかし、「先妣事略」では「十六年而有婦。孺人所聘者也。期而抱女。」とあり、この資料からすると、長女は嘉靖八年（一五二九）に生まれたことになる。『年譜』等ではすべて嘉靖八年としている。

婦有光と妻魏氏、子供との関わりを年次を追って記すと次のようになる。年号の下は婦有光の年齢である。

正徳七年（一五一二） 七歳 母が有光と魏氏との婚約を取り決める。

八年（一五二三） 八歳 母、死す。

嘉靖七年（一五二八） 二三歳 母が生前に結婚を取り決めていた魏氏が嫁いでくる。

八年（一五二九） 二四歳 有光と魏氏との間に長女が生まれる。

母の往事を話すたびに、夫婦共々泣いた。<sup>①</sup>

(九年(一五三〇) 二五歳

〈同右〉)

十二年(一五三三) 二八歳 七月、長男の子孝(翻孫)が生ま

れる。

十月、妻魏氏が亡くなる。

二十七年(一五四八) 四三歳 長男・子孝(翻孫)が亡くなる。

長男の子孝(翻孫)が生まれたころ、魏氏はすでに病であつたが、男の子が生まれたのでたいそう喜んでゐる。「女婢を呼びて抱きて以て舅氏に見せしむ」とある「女婢」は、あるいは「寒花」であつたかもしれない。

妻魏氏は一女一男を設けた。長男の名は分かっている。しかし長女の名前は分らない。長女を「如蘭」とする注釈書もあるが、魏氏が「如蘭」を生み得ないことは「女如蘭墳誌」を読めば明らかである。

「女如蘭墳誌」(巻二十二)は「寒花葬志」よりさらに短い。

須浦先塋之北、疊疊者故諸殤冢也。坎方封有新土者、吾女如蘭也。死而埋之者、嘉靖乙未中秋日也。女生踰周、能呼予矣。嗚呼、母微而生之又艱。予以其有母也、弗甚加撫。臨死乃一抱焉。天果知其如是、而生之奚爲也。

内容ごとに分け、書き下してみよう。

A 須浦先塋の北、累累たる者は故き諸もろの殤冢なり。坎方<sup>は</sup>めて封じて新土有る者は、吾が女如蘭<sup>むすめ</sup>なり。死して之を埋むるは、嘉靖乙未中秋の日なり。

① 女生まれて周を踰え、能く予を呼ぶ。

② 嗚呼、母微にして之を生むや又艱し。

③ 予其の母有るを以て、甚だしくは撫を加えず。死に臨んで乃ち一たび焉<sup>こゝ</sup>を抱く。

B 天果して其の是くの如きを知りて、之を生むを奚ぞ為さんや。

わずか一歳の子供ゆえ、その逸話は①しかない。②はその母のことであり、③は自分自身のことである。「嘉靖乙未中秋」は、嘉靖十四年(一五三五)。婦有光三十歳の年である。「寒花葬志」が書かれたのは「嘉靖丁酉」、嘉靖十六年(一五三七)であるから、寒花の死の二年前のことである。

①の逸話は、ごく普通の事柄である。「女生れて周を踰え、能く予を呼ぶ。」からすると、如蘭は前年の嘉靖十三年(一五三四)、婦有光二十九歳のときに生まれたことになる。最初の妻の魏氏が亡くなったのは嘉靖十二年(一五三三)であるから、魏氏が母親であることは考えられない。二番目の妻王氏が嫁いできたのは、如蘭が亡くなった嘉靖十四年(一五三五)であるから、後妻の王氏が如蘭を生んだ可能性

も薄い。

では、誰が如蘭の母親なのであろうか。

母親の逸話である②からすると、母は「微」であったこと、生むことが「又艱」であったことが分かる。「微」には、「いやしい」「かすか」「病弱」等の意味がある。帰有光の全作品中で「微」は百三十一回使われているが、「かすか」の意味に使われることが圧倒的に多い。しかし、この逸話②は、「いやしい」か「病弱」のどちらかである。もし、寒花が母親であるとすれば、腰から婢になっているので、確かに「いやしい」身分であり、二年後に亡くなるのであれば「病弱」でもあったろう。「又艱」も、婢の身分では生むのが難しかったであろうし、病弱であれば生むのも大変だったであろう。寒花が母親であるとすれば、すべて辻褃が合う。

再度確認すると、「寒花葬志」は「女如蘭壙誌」の二年後に書かれる。「女如蘭壙誌」で云う「微」である母親が寒花であり、寒花が長生きすれば何も問題はなかったであろう。寒花は二年後に亡くなってしまった。亡くなったからには、寒花が「微」の存在の婢であること、しかし、子供を生ませてもよい腰であることを言う必要があった。そこで、「寒花葬志」の冒頭で、「婢は、魏孺人の腰なり」、「我に事へて卒へず」と、丁寧の説明するのである。

### 三、「寒花」「如蘭」という名について

「寒花」は寒い時期に咲く花、つまり「菊」であり、「如蘭」の「蘭」

は春に咲く花である。母親と娘の名に秋と春の花をもって一対としている。それはなぜなのか。

「如蘭」の母親が「微」であり、子供に花の「蘭」の名をつけたのは理由がある。「如蘭」の名は、『左伝』宣公三年「夢蘭」の故事に基づいている、と考えられる。

初鄭文公有賤妾、曰燕姑。夢天使與己蘭。曰、余爲伯儵。余而祖也。以是爲而子。以蘭有國香、人服媚之如是也。既而文公見之。與之蘭而御之。辭曰、妾不才。幸而有子、將不信。敢徵蘭乎。公曰、諾。生穆公。名之曰蘭。

（初め鄭の文公に賤妾有り、燕姑と曰ふ。夢に天已に蘭を与へしむ。曰く、余は伯儵なり。余は而の祖なり。是を以て而の子と為さん。蘭に国香有るを以て、人の之に服媚することはくの如くならん、と。既にして文公之を見る。之に蘭を与へて之を御せんとす。辞して曰く、妾は不才なり。幸にして子有りと、將に信ぜられざらんとす。敢へて蘭を徴とせんか、と。公曰く、諾、と。穆公を生む。之に名つけて蘭と曰ふ。）

文公が「賤妾」の燕姑に「蘭」を与えて夜のときを命じたとき、燕姑は「私は卑しい身分ですから、幸いに男の子を授かっても人々が信じないかもしれません。そこでこの蘭を後のちまでの証拠にさせていただきます」と言う。文公はそれを承諾し、生まれてきた子に「蘭」と名



づけた。後の穆公である。

婦有光は、宗族に対する深い思慮があつて、『左伝』のこの故事を踏まえて娘に名前をつけたのであらう。『左伝』は、「卑しい身分」の女性から生まれた「男子」に「蘭」と名づけた。婦有光は、「卑しい身分」の女性から生まれた「女子」に「如蘭」と名づけた。『左伝』の「蘭」は男子ゆえに跡継ぎになつたが、「女子」は跡継ぎになれない、そこで「蘭の如し」としたのではないか。

さて、「寒花」という名は、實際の名だったのであらうか。「寒花」は「如蘭」の死の二年後に亡くなつてゐる。「微」なる女性から生まれた女の子に「如蘭」と名づけたことから、その「微」なる女性に、「如蘭」と対になるように「寒花」と名づけたのではないのか。「寒」には、「いやしい」「まずしい」の意があり、「微」と相通じる。

もう一度「寒花葬志」を見てみよう。文中には一度も「寒花」という名前は出てこない。

婢は、魏孺人の媵なり。…婢初め媵せし時、年十歳。双鬢を垂れ、深緑の布裳を曳く。一日天寒し。火を爇き勃齊を煮て熟し、婢之を削りて甌に盈つ。予外より入り、取りて之を食はんとするに、婢持ち去りて与へず。魏孺人之を笑へり。孺人毎に婢をして凡の旁に倚りて飯せしむ。飯に即くに、目眶冉冉として動く。孺人又予に指さして以て笑ひと為せり。

「寒い」日に勃齊の皮を剥いて甌に盈たし、つまみ食いしようとする」と甌を持ち去ってしまうことや、食事の時に「目眶冉冉として動く」という花のような可愛い女の子が描かれている。「女如蘭墳誌」には「如蘭」という名が出てくるが、その二年後に書かれた「寒花葬志」には文中に「寒花」という名が出てくることもなく、「寒」い日に愛くるしく振る舞う「花」のような女の子を描いている。「女如蘭墳誌」が先に書かれてあつたからこそ、若くして亡くなった「微」なる母親に「寒花」と名づけて「寒花葬志」を書いた、と考えられはしないか。薄幸の親と娘ゆえに、あえて「如蘭」「寒花」と、春と秋の花を対にしたのではないか。

#### 四、婦有光の哀傷の方法——花の効果——

婦有光の作品では、亡き人を哀悼するときに植物を効果的に用いることがある。その代表的な例が「項脊軒志」（巻十七）の追記の部分である。

余既爲此志後五年、吾妻來歸。時至軒中、從余問古事、或憑几學書。吾妻歸寧、述諸小妹語曰、聞姊家有閨子。且何謂閨子也。其後六年、吾妻死。室壞不修。其後二年、余久臥病無聊。乃使人復葺南閣子。其制稍異于前。然自後余多在、外、不常居。庭有枇杷樹。吾妻死之年所手植也。今已亭亭如蓋矣。

（余既に此の志を爲りて後五年、吾が妻來り歸ぐ。時に軒中に

至り、余に従ひて古事を問ひ、或いは凡に憑りて書を学ぶ。吾が妻婦寧するや、諸小妹の語を述べて曰く、姊が家に閤子有りと聞く。且つ何をか閤子と謂ふや、と。其の後六年、吾が妻死す。室壞るるも修めず。其の後二年、余久しく病に臥して無聊なり。乃ち人をして復た南閤子を葺せしむ。其の制稍や前に異なる。然れども自後余多く外に在り、常には居らず。庭に枇杷の樹有り。吾が妻死せし年、手づから植ゑし所なり。今已に亭亭として蓋の如し。

妻が亡くなる年、手づから庭に植ゑた枇杷の樹が、今や亭亭として蓋のようになってゐる。枇杷は妻の形見である。蓋のようになってゐることから、妻が死んで歳月の経つてゐることもうかがえる。次第に薄れ行く妻の記憶が枇杷を見ることによつて甦り、妻を失つた悲しみを新たにする、極めて印象的な終わり方である。「枇杷」が掃有光の作品中に現れるのはこの文だけである。

魏氏が生んだ長男子孝の死を悼む「思子亭記」(卷十七)では、山茶が登場する。

日出山亭、萬鴟來止。竹樹交滿、枝垂葉披。如是三日、予以爲祉。豈知斯祥、兆兒之死。兒果爲神、信不死矣。是時亭前、有兩山茶。影在石池、綠葉朱花。兒行山徑、循水之涯。從容笑言、手攜雙葩。花容照映、爛然雲霞。山花尚開、兒已辭家。一朝化去、果不死耶。

(日山亭に出で、萬鴟來り止る。竹樹交こも滿ち、枝垂れ葉披く。是くの如きこと三日、予以て祉と爲す。豈に斯の祥、兒の死を兆すを知らんや。兒果して神と爲れば、信に死せざるなり。是の時亭前に、兩山茶有り。影は石池に在り、綠葉と朱花と。兒山徑を行き、水の涯を循る。從容として笑言し、手に雙葩を攜る。花容照らし映じ、爛然として雲霞のごとし。山花尚は開くも、兒は已に家を辭せり。一朝化し去る、果して死せざらんや。)

山茶はもちろん息子の清楚な人柄を象徵している。花は毎年同じように咲いているのに、その花を愛でた人はいない。「永遠の生」によつてくり返し咲く花と、「一回限りの生」<sup>①</sup> しかない人とを対比して無常を詠うことは、詩ではよく用いられる手法である。

「世美堂後記」(卷十七)では、後妻の王氏を悼む部分で芍薬を効果的に用いている。

庚戌歲、余落第出都門、從陸道旬日至家。時芍薬花盛開。吾妻具酒相問勞。余謂、得無有所恨耶。曰、方共採藥鹿門、何恨也。長沙張文隱公薨、余哭之慟。吾妻亦淚下曰、世無知君者矣。然張公負君耳。辛亥五月晦日、吾妻卒。實張文公薨之明年也。

(庚戌の歲、余落第して都門を出で、陸道に従つて旬日にして家に至る。時に芍薬の花盛んに開く。吾が妻酒を具へて相問勞

す。余謂ふ、恨む所有る無きを得んや、と。曰く、方に共に薬を鹿門に採る、何ぞ恨みんや、と。長沙の張文隱公薨す。余之を哭して慟ず。吾が妻も亦た涙下りて曰く、世に君を知る者無し。然るに張公君に負くのみ、と。辛亥五月晦日、吾が妻卒す。実に張文公薨するの明年なり。」

「芍薬」は、妻の美しさの象徴であり、「芍薬」の「薬」が「薬を鹿門に採る」と呼応する。「辛亥」は、嘉靖三十年（一五五二）。身近にある花を描いて愛する者を印象づけ、その人は今はいない、と哀傷する。

### おわりに

魏氏との間に生まれた長女については、その生まれた年が、嘉靖八年（一五二九）とも九年（一五三〇）とも取れ、名前も記されていない。それにも関わらず、「如蘭」と「寒花」は、その名がしっかりと書き残されている。早くに亡くなったただけではない。

長男が生まれたとき、「先妻時に已に病むも、然れども甚だ喜び、女婢を呼びて抱きて以て舅氏に見せしむ。」と、妻の魏氏は大変に喜んでゐる。男子を生むことが、当時の女性にとっていかに大切なことであつたか。妻が病弱であつたとするなら、後嗣を残すためにも「媵」はなくてはならない。

「如蘭」は、「寒花」の子供である。花の名前で統一してあること、

「微」である「寒花」から生まれた「女子」であつたことから、正式な後嗣とはなれない意味もこめて「蘭の如し」と名づけられた。

「媵」として帰家にやって来た「寒花」は、魏氏が長男を生んだ時点で、「婢」の仕事だけでよくなつたはずである。しかし、妻が死んだ後、「媵」としての役割がふたたび担わされることになった。そこで「寒花葬志」の冒頭で「婢は、魏孺人の媵なり」と、婢でありかつ媵であることを記さなければならなかつた。「媵」であるから許されと言ひ訳しながらも、「婢」に子供を生ませてしまった苦渋のおもいがそう書かせたのかもしれない。「我に事へて卒へざるは、命なるかな」も、その複雑な心理の反映である。

媵や婢には、一般的には正式な名前はない。その媵であり、婢である女子に、「寒花」と名づけたのは、「如蘭」と対になるように配慮したもので、帰有光の深い哀悼の意がこめられているのである。

帰有光の作品中、家族の死が描かれ、かつ「花」の出てくる作品を制作年順に見ると、次のようになる。

嘉靖十四年（一五三五）	「女如蘭墳誌」	蘭（如蘭）
十六年（一五三七）	「寒花葬志」	寒花
	「項脊軒志」 <sup>18</sup> 追記	枇杷
二十七年（一五四八）	「思子亭記」	山茶
三十年（一五五一）	「世美堂後記」	芍薬

「蘭の如し」で始まる哀傷の文学が「寒花」「枇杷」へと発展し、さらに「山茶」「芍薬」へと受け継がれてゆく。「寒花」と「如蘭」は、人名として使われ、文の全体がその「花」を愛惜するものとなっている。「枇杷」「山茶」「芍薬」は、亡くなった人の生前を彩っていたモノ、かつ永続性のあるモノとして描かれ、亡くなった人を思い出させる契機となり、亡くなった人を愛惜させる。「寒花」「如蘭」は人名であるが、「枇杷」以降の「花」は人を連想させるモノ、象徴として働いている。帰有光文学において、「枇杷」以降の「花」が、無限と有限を対比させる新たな表現手法として用いられているのである。

「寒花」と「如蘭」は、封建社会の「枇杷」の木のものでひっそり咲き、散っていった。「山茶」も「芍薬」も、帰有光を一人残して逝ってしまった。

### 註

- (1) 本稿は、四部叢刊本『震川先生集』を底本とする。帰有光の文学理論については、鷺野に「帰有光の「文」理論―載道と抒情の融合―」（『筑波中国文化論叢』2、一九八三年）、  
「帰有光の「文」理論と古文の修辭法―『文章指南』よりみた―」（『国士館大学人文学会紀要』二二号、一九八九年）がある。
- (2) 『震川先生集』所収。帰有光の伝の最初のものに、息子の婦子祐の書いた「先君述」があるが、帰有光の文学については言及していない。
- (3) 鷺野「帰有光の寿序―民間習俗に参加する古文―」（『日本中国学会報』

第三十四集、一九八二年）参照。

- (4) たとえば呂新昌氏『歸震川及其散文』（文津出版社、一九九八）七二頁で、「可是先生另外有個女兒叫如蘭，不知道他的生母是誰？」と云う。
- (5) 寒花が如蘭の生母であることを最初に論じたのは、野村鮎子氏である。氏は「歸有光「寒花葬志」の謎」（『日本中國學會創立五十年記念論文集』一九九八年）で、「妻魏氏が亡くなったあと、腰が帰有光の性の対象となり、二人の間に如蘭が生まれた」とし、寒花の主人である魏氏が亡くなったあと寒花が実家に帰らず婦家にいたのは、幼児如蘭がいたからであり、家蔵本である「崑山本」に「寒花葬志」が収録されていないのは、帰有光と寒花との関係を知っていた婦家一族が憚ったためであろう、とする。
- (6) 前掲、鷺野「帰有光の「文」理論―載道と抒情の融合―」（『筑波中国文化論叢』2、一九八三年）。
- (7) 『顏氏家訓集解』巻一「後娶第四」（上海古籍出版社、一九八〇年）。
- (8) 『野客叢書』巻十五「賤庶出之子」（右『顏氏家訓集解』所集、また『四庫全書』本）。
- (9) 『弇州四部稿續稿』巻百十四（『四庫全書』本）。
- (10) 『震川集』巻十九。「嘗孕而不育，撫諸子若己出。而於妾媵皆能仁愛之，君亦數數稱其賢。」とある。
- (11) 『弇州四部稿續稿』巻一百九十五。
- (12) 『弇州四部稿續稿』巻一百十七。
- (13) 張傳元・余梅年『明歸震川先生有光年譜』（台灣商務院書館）。帰有光関係の書は多くこの年譜を根拠にする。

- (14) 同様のことが「先妣事略」にも見える。「孺人死十一年、大姊歸王三接。孺人所許聘者也。十二年、有光補學官弟子。十六年而有婦。孺人所聘者也。期而抱女、撫愛之、益念孺人。中夜與其婦泣、追惟一二、彷彿如昨。餘則茫然矣。世乃有無母之人天乎痛哉」。
- (15) 趙伯陶選注評点『婦有光文選』（蘇州大学出版社、二〇〇一年）。「祭外姑文」の「提携二孤」に注して、「指婦有光的長女如蘭与長子翽孫」（一一頁）と云う。これは、明らかに誤り。年齢等の注も誤りが多い。
- (16) 葉祖興・英子選注『婦有光抒情散文』（作家出版社、一九九八）では、「微」を「衰弱」の意味で取っている。「いやしい」と取るのは、前掲注(5)の野村鮎子氏である。
- (17) 例えば劉希夷「代悲白頭翁」の「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」など。
- (18) 『追記』の制作年については、鶴野に〈項脊軒志〉の『追記』制作年について（『中国古典研究』第二十九号、一九八四年）がある。

（中国語・中国文学専攻…教授）